

平成21年 5月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520496

研究課題名（和文） 中世都市根来寺内における荘園景観の復元研究

研究課題名（英文） The Study of SHOEN ruins around TEMPLE NEGORODERA

研究代表者

海津 一郎 (KAIZU ICHIRO)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：20221864

研究成果の概要：山東荘にみる中世都市根来の原風景

12世紀高野山時代の覚鑿の活動拠点は山東荘矢田観音堂（現伝法院）であることが確定し、弘田荘根来よりもむしろ大伝法院勢力の動向を詳細につたえることがわかった。現在の山東荘地域には、さまざまなレベルで覚鑿上人にまつわる伝承が文化財とともに伝来して、根来寺勢力の地域のなかの役割が明らかになった。初期の覚鑿教団が地域開発と密接にかかわり、それが聖域設定や病者救済活動とも一体化した空間を構成しているという中世独自の支配拠点のあり方が浮き彫りになり、戦国時代の根来寺を考える上でも、参考になる視座が提供された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史

1. 研究開始当初の背景

紀ノ川下流域の根来寺一帯は、中世最大規模を誇る宗教都市領域であり、紀州惣国の拠点として統一政権とは異なる形の近世社会を準備していた。このように、西日本の中・近世史理解の要地であるにもかかわらず、(1) 1585年の天正兵火による文献の消滅、(2) 急激な都市基盤整備事業の展開による現地調

査の困難、(3) 水田農業中心史観という歴史学界の主要傾向などの主に3つの理由によって、地域景観の復原は見るべき成果のあがっていないのが実情である。

前年、発掘調査によって、西坂本の大門池、東坂本の湯屋遺跡という2つの境界領域の構造が明らかになってきた。この研究では、20

03年末以来の発掘調査（湯屋遺跡・大門池遺跡等）と新発見文書の成果を踏まえて、根来寺寺内と周辺荘園との境界領域の景観を復原し、寺域・寺内都市・商業集落の重層構造からできている中世都市領域の実態を明らかにしたい。この研究の成果により、懸案となっている中世都市遺跡の保存と活用についても提言が可能になるはずである。

2. 研究の目的

これまで日本の荘園研究というと、東寺領や高野山領など河川中流域・平野部など内陸部の農村が中心であった。だが、近年の交通史・貨幣史などの研究成果によって、海から見た地域連鎖の視点が欠かせないものとなってきた。平成11・12年度、15～17年度の本科研による南部荘および日前宮領の研究によって、東アジア世界からの玄関口としての紀州荘園の重要性を指摘した。戦国期の根来寺は、600余の坊院が林立する中世巨大都市であり、とくに四国から南九州にかけて南海交通の拠点である。この根来寺周辺の荘園のありかたを分析することによって、類をみない治水技術に支えられた地域開発、鍛冶・鋳物師・大工・金細工など高度な技術者集団の集住する中世都市領域の様相が明らかにできるはずである

さらに、世界史的な視座から当研究課題の意義について敷衍しておく。農業民と職能民からなる地域社会の実在については、これまで論理的な想定として語られただけで（所謂網野善彦説）、具体像を踏まえた相互連関は明らかでなかった。今回、寺域・寺内都市・商業集落の三重構造を復原することによって、単に両者が存在しているというだけでなく、相互の構造的な関係や領主権力との関わり方、地域分業の展開との関係の一端に触れられるのである。現在歴史学界では、網野説を中心に20世紀末以後の社会史研究の学説的位置を

めぐって論争が続いているが、これに一石を投じるものであろう。また、海からの封建制成立を展望する議論は、ヨーロッパ中世はもちろん、東アジア世界との比較検討の上でも議論をよぶものと予想される。

根来寺遺跡については、和歌山県・岩出町・根来寺を中心にして国指定史跡化の動きがあるが、指定の範囲は指定名称「坊院跡」と呼ばれる寺域（もともと内側の円）のみに限定されている。中世都市の実態に迫るためにも、さらに周辺域の調査・研究が不可欠であり、この研究はその欠を補うものである。

3. 研究の方法

地域開発が急速に進行している現状を考慮し、根来寺および山東荘を中心とする岩出町域一帯の現地調査（記録保存）を最優先し、文献史料収集を補充する。現地調査は、水利灌漑体系、通称地名、遺物表探調査を含めた総合的な荘園調査（いわゆる水田遺跡調査）とし、とくに開発によって潰される大門池・新池等の水掛かり域については、すべての地権者から一筆ごとの農事慣行の聞き取り調査を行なう。以上の作業は、岩出町・和歌山市現地の公民館等において調査団が一定期間常駐し、機材を搬入して実施する）現地調査に不可欠となる地籍図・村絵図・帳簿類について調査・撮影し、あわせて文書群の概要の把握につとめる。

門前町のうち、東坂本地区については、湯屋（温室）遺跡・南大門跡との位置関係を重視しつつ祭祀組織（宮座）についての聞き取り調査を行ない、都市の領域と基準プランを復原・確定する。大門池・大池の門前町にとっての機能についても明らかにするように勤める。

4. 研究成果

(1) 根来寺内周辺の景観復元調査

発掘調査によって、西坂本の大門池、東坂本の湯屋遺跡という2つの境界領域の構造が明らかになってきたため、大門池と湯屋との2つを軸にして総合的な荘園調査を実施して周辺地域との関わりを解明するように努力した。

西の都市境界・根来寺大門池は、「大門」の名の通り、寺域と門前町との境界部に作られた巨大な人口池であり、その役割を考察する必要がある。発掘調査報告書の公刊が遅れているが、一四世紀遡る古堤体の発見と、近世以後における池の拡張（現堤位置）が明らかになった。中世文書の記載と近世文書の確認を並行して進め、灌漑範囲については、中左近池・住持池および新池など山内のすべての池や横断用水との関係の上で復原作業を進めて、弘田荘全域にわたる灌漑概況図が作成済みである。また近世文書によって確認された水利慣行についても、各水利組合への聞き取り調査によりほぼその意味するところが確認できた。これを基にして、中世に遡る慣行を確認することになるが、寺域境界池のもつ意味と発掘調査の成果をどのように解釈するかが課題となった。1585年の天正兵火において大門池は根来僧が入水自殺するという象徴的な空間であった（この入水は、秀吉が約束を違えて根来寺伽藍を解体したことに対する抗議の意思表示である。秀吉にしてみると、根来衆が雑賀惣国と合流して太田城に籠城したことに激怒して実施した措置、つまり太田城水攻めの一環であることが明らかになった）。この報告書においては、調査の最終責任者であった梅田志保氏の説、すなわち大門池が中世には庭池で天正兵火後に溜池となり現在に至る、を提示した。これにより、聖域と都市を峻別する宗教史の立場との折り合いが可能

になるという。梅田氏の説は、研究会の総意ではないが、要害の機能および都市域の安全を担保する治水機能も含めて、研究を推進する上での作業仮説として検討いただきたい。また、紀ノ川中流域の都市的集落（商業集落）にみられる「番編成」が、西坂本（現根来地区）に残存していることがわかったことも大きな成果である。大門池の正式な報告書の刊行が待たれる（中左近池の池尻地の発掘調査についても同様である）。

東の都市境界である戦国期の湯屋遺跡について、もとの地形を踏まえながら景観復原をおこなった。注目されることの少なかった東坂本の門前町について、大門池に匹敵する巨大池の「大池」水懸りを検討し、基礎的データを蓄積するにとどまった。

(2) 中世都市根来の源流としての山東荘矢田

今回の研究で比重をかけたのが大伝法院領山東荘の荘園景観の復元である。ここには覚鑿関係史跡・伝承が濃密に分布し、鎌倉仏や石造文化財なども含めて、根来寺の古態を伝える原風景が確認できた（くわえて根来寺内が、自治体と住民の間の訴訟問題等により、かならずしも理想的な研究環境になかった）。根来寺の根本所領である山東は、研究の進行により、弘田荘根来よりもむしろ覚鑿時代の大伝法院勢力の動向を詳細につたえることがわかった。竹中康彦氏の経典研究により12世紀高野山時代の覚鑿の活動拠点は山東荘矢田観音堂（現伝法院）であることが確定した。現在の山東荘地域には、さまざまなレベルで覚鑿上人にまつわる伝承が文化財とともに伝来して、根来寺勢力の地域のなかの役割が明らかになった。

(1) 山東大池・新池をはじめとする灌漑設備を覚鑿が整備したという勸進聖の土木工事業、および開発を妨害する地元の神々（魔物や動物に化身）を覚鑿らが霊力によって鎮

めて病を治し、雷や風雨などの自然（神）さえも加持祈祷により統御したという諸遺跡（伝法院琵琶石・とさか山）が現存する。

（2）大池下水利組合（永山川）は現在も覚鑿祭りを報賽しているが、その水利概況調査によって山東荘の荘域内のみが灌漑範囲となり、その下流域の日前宮領は永山川流が使えずに宮井を回していること。両境界部にある吉礼荘は、その恩恵に浴せず、奥地の他領に池をつくることで灌漑していること。覚鑿伝承による水利慣行が、荘園領域の規定性として現在にまで生きていることが明らかになる。

（3）伊太祁曾神社をはじめとする在地の有力神祇が、祭祀や行事において根来寺勢力との密接な関係を築いて、地域支配を拡大していることが明らかになった（伊太祁曾神社文書の解説）。また、その「伝統」関係は、伊太祁曾神社秋大祭において今も矢田地域（伝法院境内）に徒御神事が続いていることなどうかがわれる。

総じて、交通の要衝地であった山東荘矢田伝法院の一带は、高野山大伝法院（覚鑿の高野山時代）における勢力の中心拠点都市であったことが明らかになる。したがって、鎌倉時代においては現根来寺（弘田荘）は有力では有るが大伝法院勢力のオルターナティブのひとつにすぎず、山東荘矢田伝法院のなかに中世首都根来の源流・原境を見出すという方法的な模索が可能になるだろう。したがって、根来寺を内、山東荘を外とするような研究当初の問題設定の仕方は誤りであった。むしろ、初期の覚鑿教団が地域開発と密接にかかわり、それが聖域設定や病者救済活動とも一体化した空間を構成しているという中世独自の支配拠点のあり方が浮き彫りになったのである。おそらく鉄砲衆さえも地域開発・霊験・卑賤との関係で位置づけられよう。戦国時代の根来寺を考える上でも、参考になる視座が提

供された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ①海津一朗「日本中世民衆運動の思想」（『国立歴史民俗博物館研究報告』152）2009 年 357-370 頁 査読有
- ②武内雅人「史跡根来寺境内から史跡根来寺旧境内へ」（『歴史評論』687）2007 年 17-29 頁 査読有
- ③竹中康彦「紀の川市下鞆淵・大善寺所蔵の大般若経について」（『和歌山県立博物館研究紀要』12）2006 年 1-12 頁 査読無

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 和歌山地方史研究会大会報告
海津一朗・武内雅人ほか「歴史観光資源としての根来寺の可能性」 2006 年 2 月 19 日
（於和歌山市立博物館）

- ②平泉寺シンポジウム「戦国時代の平泉寺 紀伊根来寺とくらべてみよう」主催：白山文化研究会・勝山市
海津一朗「紀伊国・和泉国と根来共和国」・武内雅人「考古学から迫る根来寺旧境内の構造」ほか 2007 年 12 月 15 日（於勝山市教育会館）

〔図書〕（計 3 件）

- ①海津一朗編『中世終焉』清文堂 2008 年 5 月 全 218 頁
- ②海津一朗編『中世根来の社会史』和歌山大学 2008 年 2 月 全 52 頁
- ③海津一朗編『中世根来の内と外』2009 年 3 月 和歌山大学 全 100 頁
- ④海津一朗編『きのくに歴史探見』白馬社 全 250 頁 2006 年 5 月
- ⑤海津一朗（分担執筆）『支配の古代史』雄山閣 全 248 頁（118-144 執筆） 2008 年 3 月

〔産業財産権〕

- 出願状況（計 0 件）
- 取得状況（計 0 件）

〔その他〕（4 件）

- ①和歌山県立博物館企画展示「根来の内と外」（2009 年 1 月 31 日～3 月 8 日 於・和歌山県立博物館）企画共催
- ②武内雅人・海津一朗監修『フィールドミュージアム根来 中世自治の姿を読み解く』（和歌山大学博物館史跡地図シリーズ 2）2009 年 1 月
- ③梅田志保・海津一朗監修『フィールドミュ

ージアム根来2 大門池編』(和歌山大学博物館史跡地図シリーズ3) 2009年3月
④海津一郎監修『秀吉の太田城水攻め』(和歌山大学博物館ビデオライブラリシリーズ1) 2009年3月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

海津 一郎 (KAIZU ICHIRO)
和歌山大学・教育学部・教授
研究者番号: 20221864

(2) 研究分担者

武内 雅人 (TAKEUTI MASATO)
和歌山大学・教育学部・客員教授
研究者番号: 20423254

竹中 康彦 (TAKENAKAI YASUHIKO)
和歌山大学・教育学部・客員准教授
研究者番号: 20423257

(3) 研究協力者

鳴海 祥博 (NARUMI SYOUHAKU)
和歌山県文化財センター・主任

梅田 志保 (UMEDA SIHO)
和歌山大学・紀州経済史文化史研究所・
学芸員

大河内 智之 (OOKOUCHI TOMOYUKI)
和歌山県立博物館・学芸員

前田 敬彦 (MAEDA TAKAHIKO)
和歌山市立博物館・学芸員

北野 隆亮 (KITANO RYUUSUKE)
和歌山市都市整備校舎埋蔵文化財班・学
芸員

高木 徳郎 (TAKAGI TOKUROU)
和歌山県立博物館・学芸員